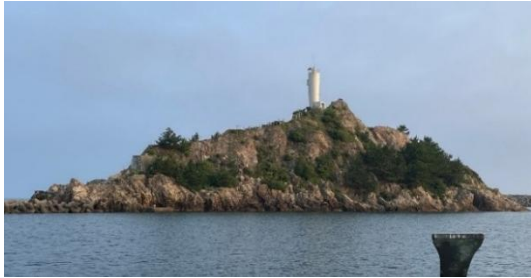


鳥ケ島と頂上祭

賀露港口の西側に浮かぶ、高さ約26メートル、周囲約400メートルの小さな島「鳥ケ島」は、賀露のシンボルです。紅色をした流紋岩からできており、岩肌には流紋岩特有の流理構造を見ることができます。島には松がまばらに群生し、その周囲には海浜植物も見られます。海上から見上げる鳥ケ島は荘厳で、神々しい姿を海面に映しています。



海の日翌日の早朝、この島で「鳥ケ島頂上祭」が行われました。島の中腹、海面に近いところには、岩に囲まれた楕円形の平地があります。ここで、大きな釜で湯を沸かし、笹を浸した熱湯を参列者に振りかけて、無病息災や漁の安全を祈る「湯立て神事」が行われました。

神事が行われた場所の背景に、宮島を望むことができます。宮島には、遣唐副使・吉備真備公が帰朝の際に嵐に遭い、流れ着いたという伝説が残されています。厳粛な神事の向こうに宮島を眺めていると、岩影から吉備真備が姿を現しそうな、どこか神秘的な景色が広がります。



湯立て神事を終えて頂上へと続く細い道を登ると、賀露の街を一望する景色が広がります。潮風が頬をなで、朝日に水面がきらめくその眺めは、江戸時代の学者・小泉友賢が『賀露神社縁起』で、賀露浦の景観を「唐土（中国）の壮麗な眺めを思い起こさせる」と評したこともうなずけます。頂上には「エビス社」という祠（ほくら）が鎮座しています。エビスは日本古来の福の神で、漁業の神としても信仰されてきました。頂上祭では祝詞が奏上され、賀露の大型漁船、小型漁船の船名が一艘ずつ読み上げられ、大漁と航海の安全が祈願されました。

鳥ケ島は、単なる海上の小島ではありません。自然や景観、伝説、信仰、そして漁業に携わってきた人々の思いが重なる場所です。頂上祭もまた、そうした鳥ケ島と賀露との深いつながりを今に伝えています。賀露の街を海から見守るように佇む鳥ケ島は、賀露の歴史や文化、暮らしを考えるうえで、大切な存在なのです。

